

授業実践報告

最高学部の哲学思想関連講義の体系化

田口 玄一郎

2021年度より最高学部(以下、学部)の哲学思想分野の講義の位置づけを明確化するため、同分野全体のポリシーに照らしながら前・後期課程の各講義の狙いを定めた。四年間を通して「3つのJ」(Jesus, Japan and Jiyu-gakuen)の視点から学部独自の哲学思想の学びを深めるというポリシーに沿って、前期課程の1年次では「キリスト教思想入門」、2年次では「戦後日本の哲学」、後期課程では「現代哲学」という新しい講義名とともにスタートした。

学部の哲学講義の始まり

「少しお休みになったら学園の大学部にはまだ哲学の講座がないから一学期に一回、出来るなら月一度位『大先生』になってお話に来て頂きたい…」(羽仁吉一(2011)「恵への手紙(1952年8月15日)』『雑司ヶ谷短信(下巻)』婦人之友社、p. 266)。これは、第三次吉田内閣(1950(昭和24)年2月26日成立)の文部大臣を務めた天野貞祐(1884-1980)が辞任(1952年8月12日付)した三日後に羽仁吉一が天野宅を訪問し、学部の哲学の講義を依頼したことを綴った三女恵子への手紙の一文である。開学間もない学部(当時は男子最高学部)の哲学の学びはこの天野への依頼から始まり、以来多くの哲学研究者によって担われてきた歴史をもつ。

学部の哲学関連講義の再編

学部の哲学思想分野の講義再編の検討は、男子学部開学70年目を迎えた2019(令和元)年より開始し、翌年の女子学部開学70年の節目に同分野のカリキュラム全体の設計が整い、2021年度より新しい講義名とともにスタートした。

再編のポイントは大きく二つある。①学部の四年間の学びのゴール、前・後期の課程ごとの到達目標を設定したこと、②一般の大学に設置された「哲学」科目とは異なる学部独自の哲学の学び方を検討したことである。とくに後者については数多くの哲学分野のうちのどのアプローチと方法が学部生にとって日々の学園生活に根ざした思想の振り返りと卒業後の生き方に重要な意味を持つかという観点で整理している。以下順を追って説明する。

学部の四年間の学びのゴールを次のように設定した。「現代哲学の議論を視野に入れつつ、議論の前提にある

伝統的(歴史的)ないし古典的に重視されてきた哲学的・宗教的考え方を学ぶことを通して「歴史的教養と論理的鍛錬(historische Bildung und logische Schulung)」を身につけること。「歴史的教養と論理的鍛錬」とは、冒頭でも紹介した天野貞祐が生徒たちに話した言葉である(天野はこの言葉をドイツ留学時の恩師で哲学者のリッケルト(Heinrich Rickert, 1863-1936)から教えられたと語ったことがある。天野貞祐「歴史的教養と論理的鍛錬」『学園新聞』(昭和33年9月号)を参照)。現在一般の大学が設置している哲学関連の講義カリキュラムにおいては、伝統的な哲学史重視の科目と、英米の分析哲学や科学哲学などを基軸とした現代の最先端の議論を扱う科目に分かれて展開しているケースが多くみられる。学部に哲学の専門コースはないが、以上の天野の言葉を参考に両方の視点でバランスよく哲学を学ぶ体制を整えることで、学部教育が目指す「生命(いのち)のよき経営者」のとくに思想面の成長をカバーする。

前後期のそれぞれの課程に講義を設置する際の基本方針は、前期課程の2年間では「歴史的教養」を、後期課程では「論理的鍛錬」を重点的に学ぶことである。以上の方向性に沿って再編した講義は以下のとおりである。なおそれぞれの講義名は天野がしばしば在校生に語ったといわれる「3つのJ」(Jesus, Japan, Jiyu-gakuen)の視点を生かして新たに検討したものである。

<前期課程>

キリスト教思想入門(Introduction to the Christian Thought)

戦後日本の哲学(Philosophy in Postwar Japan)

< 後期課程 >

現代哲学(Contemporary Philosophy)

リフレクション・ペーパー

2021 年度は新型コロナウイルス(以下、コロナ)の流行期と重なり、法律に基づき外出等の自粛が求められる間、学部の講義を受講する学生たちは原則対面とオンライン(マイクロソフトの Teams、以下 Teams)のいずれかを選択して参加できることを認めた。これまで学部の哲学思想関連の講義ではプロジェクトでスライド資料を映し出すことが多く、コロナ禍において受講生(対面、オンライン)に提供した講義内容に著しい差が生じることはなかったと思われる。

また再編後の哲学思想関連の講義において重視した取り組みとして、各講義の受講生は毎回の講義の後に「リフレクション・ペーパー」を提出することにした(提出期間は、毎回講義の終了後から次回講義開始までの間)。「人は哲学(Philosophie)を学ぶことはできない、...ただ哲学すること(philosophieren)を学ぶうだけである」(I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A837, B865)とはカント(Immanuel Kant, 1724-1804)の有名な言葉であるが、聴くだけでなく受講生自身のみずから考える(thinking)力を身につけることが「リフレクション・ペーパー」の眼目である。「何も皆さんがカント先生のようなえらいことを考えるとは思わない 毎日ここに来るたびに 皆さんがものを考える その考える力を見せてもらいたい」(羽仁吉一「考える力(1954 年女子部普通科受験生向けの講話)」(『自由人をつくる—南沢講話集』自由学園出版局, 1991)pp. 104-106)という創立者の言葉はそのまま学部で哲学を学ぶ上でも大切にしたいスタンスを示している。

再編前の講義では学部教師室に設置された小さな用紙を配布して受講生はこれに記入していたが、コロナ禍ではオンライン参加の学生がいることから、Teams が提供する「課題」機能を活用することで受講生がオンライン上から「リフレクション・ペーパー」を提出できるようになった。

「リフレクション・ペーパー」では受講生は基本的に何を書いても良いとした上で、参考までに次のような目安を示している。

「次の三項目(目安)から毎回一つ以上を選び 100 文字前後で記述してみてください。」

- ・本講義の要約と要点

- ・本講義を聴いて考えたこと・疑問に思ったこと
- ・哲学・思想全般に関する質問・疑問

また受講生の中にはそれ自身の考えを文字化するよりも口頭で発表する方が得意な学生もいることから、上記の「リフレクション・ペーパー」に代わる課題として、自分自身が考えたこと(見解・思想)を講義中に 2 回以上発言することも認めている(質問の場合は教員からの投げかけにも応答してもらおう)。全体の傾向として「リフレクション・ペーパー」に取り組む学生が多いが、発言することに積極的姿勢を見せる学生、発言と「リフレクション・ペーパー」をともに取り組む学生もいる。講義の回数を重ねるごとに「考える力」が深まっていく学生の成長を「リフレクション・ペーパー」や講義中の発言の中に感じることもある。また正直に「わからない」、「難しい」というコメントを寄せてくれることもある。

現代ではインターネットや「ChatGPT(Generative Pre-trained Transformer)」のような便利なツールを用いて簡単に情報を検索し処理することが自由にできる時代を迎えている。これらのツールは自分自身の思想を深めるためのインプット情報としてだけでなくそれを表現(アウトプット)する媒体としても活用可能であるが、道具(機械)を使用する人間自身の「考える力」とは何か、いま改めて問われている。道具(機械)に任せて体裁よく表現されたものは翻訳であって思想ではないからである。他方、上記の「わからない」や「難しい」などの経験は一見ネガティブではあるが、そこにはみずから「考える力」を培うためになくてはならないもの、生きるための根本的な土台がある、換言すれば、「わからない」や「難しい」という自己表現の中にこそ思想の萌芽があると筆者は考えている。哲学の学びに対して前向きな人はもちろん、わからない人、難しいと感じている人も共に学び合い成長する民主的な時間を学部では大切にしたいと思っている。

以下では新設の各講義について詳しくみていく。

キリスト教思想入門

本講義は学部 1 年対象の必修科目(半期)である。「歴史的教養」として、先述のとおり「3 つの J」のうちの「Jesus」すなわちキリスト教の思想的理解を深めることが狙いである。キリスト教思想とひと言でいってもその歴史は長く、国や時代ごとにその影響は多岐に渡りすべてを網羅することは一人の力量を超えている。そこで本講義が扱う範囲を、以下

二つのアプローチに沿って、キリスト教を基盤としてヨーロッパ哲学の伝統を形成してきた哲学者、及びヨーロッパ哲学から影響を受けた近代日本の思想家のいくつかの「宗教的言説」に限定する。

第一のアプローチは、自由学園の日々の「生活」における身近な事例(毎朝の礼拝、教会がないこと、人対象の生活と神対象の生活 etc.)からキリスト教について考えることである。一般的に聖職者養成のための神学部や神学校におけるカリキュラムの学問体系はキリスト教信仰を前提とするのに対して、本講義が共通の出発点としているのはキリスト教信仰ではなく自由学園での「生活」である(受講生の中にはキリスト教としての生き方を実践している学生もいる)。学部で学ぶ学生たちは自由学園での「生活」を通してキリスト教とのさまざまな出会いを経験し、「生活」経験に根ざした「キリスト教精神」をお互いに共有している。本講義ではキリスト教信仰に基づく神学的な一般命題を探究する以前のこの原体験を起点として、一見ユニークに見える「自由学園のキリスト教」理解を同心円的に拡大していく。受講生自身の「生活」と切り離すことのできない「自由学園のキリスト教」の諸特徴は、歴史的にその周囲にある近代日本及び欧米のキリスト教思想との比較からより明確化される。比較対象として取り上げるのは、内村鑑三(1861-1930)、植村正久(1858-1925)、岩下壮一(1889-1940)、波多野精一(1877-1950)などの近代日本を代表するキリスト教思想家たち、またアウグスティヌス(Aurelius Augustine, 354-430)、ルター(Martin Luther, 1483-1546)、ジェームズ(William James, 1842-1910)、ヴェーバー(Max Weber, 1864-1920)などの欧米におけるキリスト教思想の基本的な考えを形成した宗教哲学者たちの言説である。受講生はこれらの思想家・哲学者の言葉に触れながら、各々の「生活」の中で経験し互いに共有してきた「キリスト教精神」について哲学的に考える糸口を掴むことになる。

第二のアプローチは、主たるテキストとして「ヨハネによる福音書」(以下、ヨハネ伝)を取り上げることである。必要に応じてヨハネ伝以外の聖書の箇所に触れることはあるものの、本講義では旧約から新約までの内容全般をカバーするのではなくヨハネ伝に記されたいくつかのキーワード(光と闇、受肉、涙、自由と奴隷、友愛など)に注目し、それらの概念と関連する上記の思想家・哲学者たちの言説を繙くという方法をとっている。ヨハネ伝研究はとくに前世紀のブルトマン(Rudolf Bultmann, 1884-1976)などによって目覚しい

発展を遂げてきたが、ヨハネ伝はキリスト教思想史上多くの思想家・哲学者に深いインスピレーションを与えてきた文書の一つである。受講生は日欧米のキリスト教思想家・哲学者の言説の中に時代を超えて臨在するヨハネ伝の哲学的ポテンシャルを再発見しながら、最終的には自由学園の校名の原点といわれるヨハネ伝の「自由」についての理解を深めることを目指す。

以上二つのアプローチに沿って本講義は進行する。講義中ではさまざまな思想家・哲学者の本だけでなくヨハネ伝からの引用を多用しながら解説し、スライド資料ではしばしば日本語と合わせて各書原文の諸外国語(英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、古典ギリシャ語)を併記している。学部の現行カリキュラムには英語以外の上記の諸外国語を学ぶクラスはないが、原文から哲学者・思想家たちの言葉の意味を深く知ることが重要と考え、受講生が原文を読めなくても理解を深められるように工夫している。

受講生の中にはキリスト教とそうでない学生がそれぞれいるが、講義全体を通して受講生間にキリスト教理解の大きな差を感じることは少ない。一人一人に共通のベースである自由学園の「生活」の中で各人がキリスト教と出会い、たとえ教会生活の中で育まれる信仰はなくても日々の学園生活を通じてキリスト教精神の大切さを学んできたからではないかと思われる。

戦後日本の哲学

本講義は学部2年対象の必修科目(半期)である。前記の「キリスト教思想入門」と同様に前期課程における「歴史的教養」として、「3つのJ」のうちの「Japan」(=日本)についての哲学的理解を深めることが狙いである。本講義が取り上げるのは自由学園の戦後教育に関わった「京都学派」(the Kyoto School)の思想である。

現在京都学派の思想研究は国内外で大きな広がりを見せているが、その多くが戦前及び戦中の彼らの思索にフォーカスされている。本講義では同学派の戦前から戦後へ連続する面とともに戦後において新たに展開された面にも光を当てるべく、戦後彼らが自由学園での講義や講演のために訪れた際の記録資料(羽仁西先生記念図書館所蔵の『学園新聞』など)に着目し、それらの記録に記された彼らの思想的ポテンシャルを理解し再評価することを目指す。

講義の初回では、近代日本の独創的な哲学者・西田幾多郎(1870-1945)と田邊元(1885-1962)という二つの中心

思想から「京都学派」が成立したことを確認する。その上で彼らの弟子たちの多くが戦前戦中の思想的反省の上に戦後新たな思索を展開していくプロセスを前記の記録資料を手がかりにしながら順次みていく。講義中に取り上げる京都学派の哲学者と関連する記録資料の出典は以下のとおりである。

- ・西田幾多郎「国家の創造」『婦人之友』(昭和13年4月号)
- ・田邊元「私の憂ひ・私の喜び(又は希望)」『婦人之友』(昭和12年1月特輯号)他
- ・木村素衛(※敗戦の翌年に逝去。戦前の学園と関わりがあったかについては不明)
- ・天野貞祐「愛の協同体—入学式の言葉」『学園新聞』(昭和41年4月号)他
- ・鈴木成高「歴史の知恵」『学園新聞』(昭和43年9月号)
- ・高坂正顕「人生の幸福」『学園新聞』(昭和38年4月号)
- ・高山岩男(※記録未確認)
- ・下村寅太郎「科学の歴史について」『学園新聞』(昭和39年9月号)
- ・西谷啓治「現代人と宗教」『羽仁吉一・もと子先生記念講演第八回』(昭和42年4月)
- ・辻村公一「思索の手仕事(上・下)」『学園新聞』(昭和51年9-10月号)
- ・大島康正「民主主義とは何か」『学園新聞』(昭和36年12月号)

これらの記録資料に記された京都学派の哲学者と自由学園との関係は一樣ではなく、一度だけの関わり(記念講演や卒業式の来賓祝辞)、女子学部卒業生対象に毎年夏に開催された「夏期学校」に複数回登壇するなどさまざまである。同学派の哲学者たちが全体として自由学園の戦後教育に継続的に関わり続けたことを物語る貴重な資料といえるだろう。

毎回の講義では記録資料を受講生に事前に読んできてもらったうえで、それらの内容を、それぞれの哲学者の戦前の思想との連続性の上で理解するとともに、同時代の西洋思想(ドイツの現象学、実存主義、フランクフルト学派など)や日本思想(とくに戦中の京都学派に対する諸批判)と比較しながら、戦後思想史の大きな流れの中に彼らの思想を位置づけるを試みる。

例年、講義開始時点の受講生から「難しい……」という反応

がある。前記の「キリスト教思想入門」の場合のように受講生が「生活」という共通のベースに立って学ぶアプローチとは異なり、本講義では受講生一人一人のさらに足元の、現代の直下の歴史の中にある思想に光を当てるを試みるため、あたかも無意識下にある潜在的な問題を意識化するような困難を伴い、受講生の中には受け容れ難い印象や苦手意識を持つ学生がいるのではないかと思われる。しかし講義を重ねるごとに受講生たちの日本思想に対するイメージが徐々に変わっていき、講義後半になると「わかってきた!」という率直なコメントを寄せてくれる学生がいる。毎年そのような受講生の思想的な変化と成長を傍で見守る中で、自由学園が思想性の豊かな学校であることを再認識するとともに、創立100年の歴史と伝統の中でその思想性の形成の一端を担った「京都学派」の哲学者たちの存在の声を現世代の学生たちと共に共有できる有難さを感じる。

現代哲学

本講義は後期課程(3-4年)の選択必修科目(半期)である。これまでみてきたように前期課程での学びの目的が「歴史的教養」を身につけることであったのに対して、後期課程のそれは「論理的鍛錬」であり、そこでのテーマは「3つのJ」のうちの「Jiyu」すなわち「自由」である。本講義を受講する学部生は哲学的自由論の最新の議論から学びつつ、学園卒業後も継続的に「自由」について考え続ける思考力を身につけることを目指す。

現代哲学のキー・コンセプトの一つは「言語」(Language)である。これまでドイツ、フランス、英米などを中心に「言語」をめぐる数多くの哲学的問いが立てられてきた。本講義では英米の分析哲学(Aalytic Philosophy)の議論を足がかりとして、そこで「自由」(Freedom, Liberty)ないし「自由意志」(Free Will)という概念がどのように批判的に捉えられてきたのかをみていく。

講義中はテキスト(日本語)の読解を中心に、解説を加えながらディスカッションをする。前期課程の二つの講義では「リフレクション・ペーパー」を重視したのに対して、本講義では受講生各自の発表と互いに議論することをメインとする。受講者はテキストの担当箇所を選択し、事前に徹底的に読み込んでくることが求められる。毎回の講義では受講生が順番に読み込んできた成果を発表し(発表方法は自由、発表時間は15分程度)、発表後に他の受講生と共に積極的に議論に参加する。

初年度(2021)に取り上げたのは、オックスフォード大学を拠点に活躍した「日常言語学派」(Ordinary Language Philosophy)を代表するライル(Gilbert Ryle, 1900-1976)の『心の概念』(*The Concept of Mind*)である。講義ではこのうちの第3章「意志」を丁寧に読み進め、「意志」(the Will)という哲学的に特殊な概念についての理解を深めつつその成立可否について議論することができた。

2022年度はアプローチを変えて、現代政治哲学における最重要人物の一つであるロールズ(John Rawls, 1921-2002)の『正義論』(*A Theory of Justice*)を取り上げた。邦訳で813頁に及ぶ大著であり、そのすべてを扱うことはできなかったが、主要な章を受講生間で分担して読み進めた。難解な内容ではあったものの、同年2月にロシアのウクライナ侵攻が始まり、改めて「正義」の原理とは何かという根本的かつ切実な問いと向き合う時間を受講生たちと共に共有することができた。

2023年度は自由意志と倫理的行為の関連性をめぐる議論に注目した。現代自由意志論を代表する論者として知られる فرانクファート(Harry Frankfurt, 1929-2023)とヴァン・インワゲン(Peter van Inwagen, 1942-)の3つの重要な論文(門脇俊介ほか編(2010)『自由と行為の哲学』(春秋社)所収)を取り上げた。二人の哲学者の立場は「両立論」(Compatibility)と「非両立論」(Incompatibility)に分かれ、自由意志論と決定論(Determinism)の関係をいかに捉えるかという点で対照的な主張を展開している。普段思いつかないような哲学的思考と議論の展開に受講生たちは驚きつつも、畑を耕し作物を丹念に育て上げる生産者のように、一個の概念の意味内容を徹底して掘りさげる哲学者たちの真摯な姿勢から多く学ぶことができた様子であった。

おわりに

自由学園最高学部は専門教育に特化した学部・学科を擁さない、2年間または4年間を通じて人間教育のためのリベラルアーツを核とした独自のカリキュラムを有してきた。極端に教養教育でも職業教育でもない、一人一人の人間に具わる多様な可能性と能力をみずから発見し実現していく時間のかかる歩みであり、文理の別にかかわらず、また文理の枠を超えて学部生はさまざまな学びを経験する。学部の哲学的な学びはその一つとしてこれまで続けられてきた。そこでは哲学の専門的な知識を修得すること以上に、学部生が哲学という一つの学問的世界に直に触れること、

その新たな経験をこれまでの「生活」経験という地平に重なり合わせることを大切にしてきたといえる。

今回の哲学関連講義の再編が、学部で哲学を学ぶことの伝統的意義と創造的発展をともにさらに再確認し推進する一つのきっかけとなるのであれば、筆者にとって望外の喜びである。

本報告は、2021年度自由学園最高学部特定課題研究費(課題番号 JF21D08)の助成を受けたものである。

謝辞

学部の哲学思想分野の講義再編の検討にあたり、女子部46回生の岡本由起子先生(慶応義塾大学卒業、博士(哲学)、自由学園、慶応義塾大学、放送大学講師、東京家政学院大学助教授等を経て現在、情報知識学会常務理事)には大変お世話になりました。学園卒業生として、また哲学の専門家としての観点から貴重なアドバイスを賜りました。この場をお借りして心からの感謝の意を申し上げます。